



みるトレ 感染症

笠原 敬・忽那 賢志・佐田 竜一 著

B5 頁200 2015年

本体 3,800円+税

[ISBN978-4-260-02133-3] 医学書院刊

評者 徳田 安春

地域医療機能推進機構 (JCHO) 本部顧問

医師一人が経験できるケースは限られている。一方で、みたこともないようなケースの患者さんがどんどん受診してくる。いったいどうすればよいか？ 院内のケースカンファレンスでは検査所見と画像所見のダブルチェック作業が中心であり、病歴や身体所見を吟味し解釈するトレーニングは困難である。一方で、院外の勉強会を覗きに行くと、詳細な病歴聴取をしたかどうかのツッコミが参加者から投げかけられ、症例提示者は鍵となる病歴を隠そうとして慌てる姿をさらけ出す。このような会に出ているだけで臨床能力はほんとうにアップするの？ という質問を聞くことがよくある。

グレートケースを「リアルに」類似経験できる

そこに本書が登場した。百聞は一見にしかず。もちろん病歴は詳細であり、呼吸数も含めてバイタルもきちんと提示されたケース集。しかしハイライトは本書のタイトルにもあるように「みる」こと。身体所見やグラム染色所見が生の写真で出てくるので、読者は担当医でなくてもこのケースを「類似」経験できるのだ。勝手に想像して「疑似」体験するしかない文章ではなく、文字では伝えきれないリアル感が写真に現れる。

著者の三人は貢献度大だ。グレートケースを惜しみなく提示。このリスペクトすべきお三方は、スマホや

カメラを駆使して毎日のケースを記録しシェアしてくれているのであろう。写真の撮り方はためになる。スマホの登場はEBMのベッドサイド導入に役立ったが、まさか爆発的なケースシェアをもたらすことになるとは。

感染症の診断プロセスそのものを学べる

「みる」診断はSnap Diagnosisともいわれ、直観的診断(システム1)に含まれるため、冒頭には、臨床推論総論も展開されており、臨床推論入門書としても使える。New England Journal of Medicine (NEJM) などのimage in clinical medicine 投稿の戦略論も含まれている。世界最強のimage in clinical medicine 対策本といえる。

本書を読むと、微生物検査室を愛する感染症医の気持ちを理解することができる。カラフルな寒天培地やコロニー、そして「一心不乱に検体を塗抹する研修医(佐田氏?)」の美しい姿。数学者が数式を愛するように、感染症医は培養された細菌を愛しているかのようにもみえる。これは素敵な臨床写真を本書で「みる」ことで興奮しすぎた評者の錯覚だろうか。ちなみに泡盛ファンである評者は、もちろんアワモリコウジカビ(泡盛麹黴, 学名: *Aspergillus awamori*)は好きだ。でも、*Aspergillus fumigatus* は好きになれない。その理由は本書のCASE 47 をぜひみてほしい。